

Title	「Theippan Maung Waの作品を通して観察したビルマ人の人間性」
Author(s)	服部, 正一
Citation	大阪外国語大学学報. 19 p.39-p.59
Issue Date	1968-06-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80311
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「Theippan Maung Wa の作品を

通して観察したビルマ人の人間性」

နိ ဒါနိ:

服 部 正 一

န မေဝတဿာ ဂဝ ဂေဝအရဟ ဂေဝသမ္ဘဝသမ္ဘဝ | ဧသ

လူသူတပါး ၏ စိတ်သဘောကို နှိုက်နှိုက်နှဲနှဲအလုံး စုံကိုနား လည်ရန်
မှတ်အလွန်ခဲယဉ်း သောကိစ္စမျိုး တခုပင်ဖြစ်ပါ၏။

၎င်း ပြင်ထိုးသူသည် နိုင်ငံခြား သား ဖြစ်ပါမူ ပိုမို၍ ခဲယဉ်း ပါ
သည်။ သို့ဖြစ်ပါသော်လည်း ၊ ကျွန်တော်သည် ခုတိုင် အောင် ဖတ်
ဘူး ခဲ့သော ခေတ်စမ်း စာပေစာအုပ်များ အနက်သိပ္ပံ မေောင်ဝ
ကိုမြန်မာ့ဆန်သောလူတယောက်အဖြစ် ဖြင့်ထင်မှတ်၍ သူရေး သား
ခွဲသော စာအုပ်များ ၏ ဇာတ်ထဲတွင် ပေပါလာ သော မေောင် လူ
အေး ဆိုသူအကြီး အမှူး တယောက်ကို နှိုက်ချွတ် ဖွေရှာ စစ်ဆေး ၍ သိပ္ပံ
မေောင်ဝ၏လူ့ ဇာတိကို တတ်သမျှထိုး ထွင်း သိမြင်ခြင်း ငြိကြွယ်မိ
ပါသည်။

သိပ္ပံ မေောင်ဝသည် စကား ပြင်ရေး သား စီကုံး သူဖြစ်ပါ၍ ငယ်
သောအခါကစ၍ သက်တွေ့ မြင်ခဲ့သော အကြောင်း အရာများ ကို
ဝတ္ထုဆောင်း ပါး များ အဖြစ်ဖြင့် ရိုး ရိုး တည်တည်လင်း လင်း ရေး
သား ခဲ့ပါသော ကြောင့်လူအများ ကြီး သည် ၊ အထူး သဖြင့် သိတတ်သော
လူတန်း စား နှင့်တကွ သိုလ်ကျောင်း သူကျောင်း သား များ သည် သူ
ကို နှစ်သက်သဘော ကျပြပါသည်။

ကျွန်တော်သည် သူရေး သား သောပုံဝတ္ထုများ ကို သူတဦး တ
ဇယာကတည်း နှင့်သဘာဝစီဆိုင်သော ပုံပြင်အဖြစ် ထင်မှတ်၍ မောင်
လူအေး မှတဆင့် သိပ္ပံ မေောင်ဝ၏လူအရည်အချင်း နှင့်လူဖြစ်စဉ်ကို သူ
တေသနစုံစမ်း ရှာဖွေရေး သား ရပါသည်။ ။

人間とは所詮不可解なものである。まして他国民とあっては尚更である。しかし、私は及ばずながら、私がこれまで好んで読んだ若干の近代ビルマ作家の中で Theippan Maung Wa を最もビルマ的な人間と見做し、彼の作品中に登場する主人公 Maung Lu Ai なる人物を掘りさげて解剖し、ティパン・マウン・ワーその人の人間性を洞察して見ようと思う。

先づはじめにティパン・マウン・ワーという雅号で知られている U Sein Tin の概略について述べなければならないであろう。彼はウ・オン・シュエを父にドー・ドー・ティを母に、ビルマ暦1261年（西暦1899年）モールメイン市のムー・ポンナ・チャウンという所で生れた。ビルマ暦1282年（西暦1920年）、シン・マハ・ボッタ・ゴサ学校に在学中に第10級試験にビルマ語とパーリー語で合格した。

（註） ビルマの教育制度は1年～4年が小学校、5年～7年が中学校、8年～10年が高校程度となっている。従って第10級試験に合格すれば大学入学の資格が得られる訳である。

彼は文章を書くに当っては散文形式を得意とし、その簡潔明快な文体は人々に好まれる。幼少の頃より感じていたこと、経験したことを Wadziya Tin という筆名で新聞紙上に小論文を書いている。第10級試験に合格した後、現在のラングーン大学に席を置いた。

（註） 彼が在学の頃 Yangon (Rangoon) Koleip (College) Theippan Kyaung: と言い、現在のラングーン大学の前身である。

彼は同時にラングーン市内の学校で教えながらアルバイトをしていたが、ビルマ暦1286年（西暦1924年）前期試験に合格し、1289年（西暦1927年）には Myanma-sa-gon-htū: (ビルマ文学優秀科) にて一番で学士号を獲得した。

（註） Gon-htū: 制度とは前期教養課程を終えた者の中で特に優秀な者が選ばれて進む専攻科のことであって、期間は3年、この課程を合格すると大学の教官や政府高官への道が開かれている。

彼はラングーン大学で最初にビルマ文学にて学士号を得た人である。その後、英国のオックスフォード大学で政治学を学んだ。1291年（西暦1929年）に帰国し、政府機関に入った。政治の分野において腕をふるっていた一方文筆の方も精進を重ねていたのであるが、戦時の混乱期に1942年も終らんとするある日、シュエボからほど遠くないガーダーセジー村において暴漢たちの手にかかり、浅瀬に沈められて、その生命を絶っている。6月6日夜も白々と明けんとする頃であった。歳は43才の若さであった。

彼は文学批評を Theippan Maung Mya Thwin という名で、小説を Theippan Maung Wa という名で、また道德書を Tin Maung Min という名で書いたのである。上記三部門の他にも種々な事柄について種々な筆名を用いて書いている。彼は散文に秀いでた人であったことは前述

の通りであるが、また彼には他の作家のような諷刺や皮肉、また殊にビルマの作家に多い誇張した表現などはほとんど見当らない Yō: yō: (飾り気ない、そのままの) な性格も極めて好感のもてるものである。従って、彼の作品は学生や知識階級の間で好んで読まれる。彼の功績の一つはこの散文によってビルマ文学の高揚に尽したことである。彼は自分が見聞した人生の諸相を思うがままに自由奔放に明らさまに書きまくった人である。

ビルマ近代文学が思慕、憐憫、悲哀の感情を有する人間及び社会の本質を表現して、言葉の修辭裝飾にいたずらに重点を置かず、簡潔明瞭に表現しようとする文学である以上、ティパン・マウン・ワはビルマ近代文学を創始した作家の中の一人であると認められるのも当然であろう。

ビルマ独立以前は郡政高官の一人として下ビルマ及び上ビルマの諸地方の町々に赴任し、ひどく僻地の村落までを遍歴し、業務にたづさわる片わら、自分の経験を基礎として、時には嬉しいこと悲しいこと、楽しいこと、恐ろしいこと、またある時は人の心を打つような小説(論文) (Wutthu hsaung: bā: と彼は呼んでいる) を書いたのである。また彼は人文地理の著者としても知られていて、ビルマの山丘地帯に住居する少数民族についても知識が広がった。

彼は「Av-a (地名)」「快樂」「イラワディ河」「刑法110条」等の作品を初めとする幾多の作品の中で役人であるマウン・ルー・エーという人物を主要登場人物として登場せしめ、マウン・ルー・エーが如何なる場所で、如何なる仕事のために、如何なる人物と会い、どのように処理し、どのように考えたか。またどのような誠実さを持ち、どのように思いやりのある態度を示したか等々を述べている。そこで私はこれらの作品を一種の私小説的なものと考え、マウン・ルー・エーを通じて Theippan Maung Wa その人の人間性を探ってゆこう。

主な作品を年代順に紹介すると、

- | | |
|--------------------------|----------------|
| (1) Dō taw ywā (我らの村) | 1929年タバウンの月 |
| (2) Sī: zein (快樂) | 1930年タザウンモンの月 |
| (3) Eyāwadi (イラワディ河) | 1930年ピャゾの月 |
| (4) Damyā-hmu (せつ盗罪) | 1930年ピャゾの月 |
| (5) Kin: saung (船名) | 1931年タグーの月 |
| (6) In: wa (地名) | 1931年カソンの月 |
| (7) Min: Lat (船名) | 1931年ダディンチョッの月 |
| (8) Bedā (ベーター樹) | 1931年ピャゾの月 |
| (9) Tayā-ta-hse (刑法110条) | 1931年タボドゥエの月 |
| (10) Myin: dwe (馬) | 1932年トーダリンの月 |
| (11) Nebaing min: (地方長官) | 1932年ダディンチョッの月 |
| (12) Le-lan-bwè (競売) | 1933年カソンの月 |
| (13) Ywe: -kauk-bwè (選挙) | 1933年ワーガウンの月 |
| (14) Nya-ne-hkin: (夕暮) | 1933年ピャゾの月 |
| (15) Alot-let-mè (失業) | 1934年第1ワーゾ月 |

(16) Lū-maik (ならず者)	1934年第2 ワーズ月
(17) Shwe-da-gon (シュエダゴン・パゴダ)	1934年第2 ワーズ月
(18) Setanā (誠意)	1934年タバウンの月
(19) Myin : -bwè (馬市)	1935年タボドゥエの月
(20) Hlè : thamā : (牛車追い)	1936年ワーガウンの月
(21) Anyā-hpāyā : -bwè (上ビルマの仏祭)	1936年ダディンチョットの月
(22) Thin : dō-hnit gaung (彼奴ら2匹)	1936年ナッドーの月
(23) Ahkyit mī : (愛の焰)	1936年ピャゾーの月
(24) Kalā : dō-ahpe (子供たちの父)	1937年タグーの月
(25) Maung Lū Hmoe (人名)	1937年 { タボドゥエの月 タバウンの月 }
(26) Myō : -yō : (血統)	1939年10月1日
(27) Hkyeit-pon-kyaw (幼児の言葉)	1940年9月27日
(28) Maungnge hniṇ hkwe:(マウン・ンゲと犬)	1940年タバウンの月
(29) Hnaik-hnaik-hkywot-hkywot (探さく)	1941年タザウンモンの月
(30) Maung : than (銅羅の音)	不明

等である。

各作品の中に出て来るマウン・ルー・エーという人物を5つの項目に分析することができる。

1) Maung Lu Ai の概貌

彼は夢や望みを一つの的として勇往邁進するというタイプではなく、美しいものを見ては心うたれ、静かなる所では沈思黙考し、青々とした田畑を見れば心晴れ、子供にはほえみかけ、老人を愛すという一見平凡ではあるが、また悠々自適の日々を送る人のようである。「快樂」という作品においては“彼がいつまでも独身であるために友人たちから嘲笑されても、その名にふさわしく (Maung Lu Ai という名は「冷静・沈着・静かな人」を意味する) たった一人で泰然自若、人が何と言おうと全く平気である”と書かれている。また“川面に浮ぶ漁船、水辺に戯むれる鷺やかわけみ等を見るにつけて心の休まる思いがする”とも書かれている。「Min : Lat (船名)」にも物静かな情景やほほえましい場面に、子供っぽい、だがしかし見方を異にすれば悟り切った大人としての感動を表わしているところなどは波風荒い生活を好まない彼の生き方の片鱗をうかがうことができるであろう。そして「快樂」の終りの部分で「結婚することが人生のすべてではない。」と言って、トラガカント・ゴムの樹に巣くうふくろうの声を聞きながら安楽椅子にすやすやと眠り込んでしまう場面があるが、そこで作者は「この快樂に勝る快樂があり得ようか」とも言っている。実に彼の名にふさわしい性格を表わしている。また「夕暮れ」の中でも黄昏の心地よさを楽しむ同じような場面が描かれている。ところが、また一面、勤務中の仕事のことを思い出しては、謂わゆる世の中の“coil and turmoil”に心を痛めている様子がうかがわれ

る場面がある。“Eyāwadi” の p.13 に次のように述べられている。

(ビルマ文省略) (道すがら仕事のことのみにあれこれと考えながら帰って来た。家に着いてもそのことばかりが頭にこびりついてた。夕方になってお茶を飲んでいてもテーブルに向っていても仕事のことを気にかけていた。坐っていても、立っていても、散歩していても、そのことばかりが心の中にまとわりついてた。このように考えてばかりいるだけで決断を下すのがどうも難しかった。)

このところ Maung Lu Ai がややともすれば Maung Lu Pū (「心配がちの人」の意) [Maung Lu Ai の “Ai” が「涼しい」に対して “Pū” は「熱い」の意味をもっている。] (ビルマ語では「涼しい」は「平和」に通じ、「熱い」は「心配」を表わす) にもなりかねないところを表わしている。このような性格は彼の義務に対する責任感の強さにも通じるが、彼の小心翼翼たる性格をも示している。

2) Maung Lu Ai の日常生活

Theippan Maung Wa の作品の中で、マウン・ルー・エーなる人物は時としては郡政長官に、時としては知事に、又時としては裁判官等になって登場するが、いずれにしても役人としての生活を送っている。それでは実際どのような生活ぶりであっただろうか。「快樂」においては次のように書かれている。“マウン・ルー・エーは大学卒業後、役所仕事についたので収入の道はほぼ確定していた。衣食に関しては何も心配することはない。無事息災に生活できた。教育も充分であり、職業にも就いており、真面目であることも人々の知るところであったので、彼を養子にしたいという未来の義理の親もかなり現われた。” 又他方、一風変わった生活態度も同じ作品の中に次のように書かれているのが見出される。“彼は他の人々のようにすばらしい生活にも憧れず、現在使用している家の中の道具や家具も多すぎると考えて、捨ててしまいたい位いだと言うほど変ったところもある。” と、そして「イラワディ河」においては裁判官のマウン・ルー・エーが判決を下すに当って非常に几帳面なその性格の故に、仕事が思うように進行せず、誤ちを犯したことに對して悩む様子を克明に読みとることができる。また日常生活においても役人として法に忠実な態度を「強盜」、「第110条」等から読み取ることができる。とは云ってもいくら勤務に忠実なマウン・ルー・エーにも次のような気分になることがたまたま起る。「Ava」の中で“その日は役所へ出なければならぬのがとてもいやだった。家で氣楽に丸くなって寝たい。安楽にしたいがそうもいかない。”と書かれているように、現在の我々の社会でよく見受けられるようなサラリーマン氣質の断片にやや類似した点がうかがわれる。

3) Maung Lu Ai の宗教観

Theippan Maung Wa がビルマ人である限り、彼の作品中には随所に涅槃の境地、即ち諦観し

た仏教思想というものが表現されていることは当然と言わねばならない。しかしその仏教思想が、一作品における最も重要な部分、言わばその物語の分岐点において、あるいは最も感動的であるべきその終局において、しばしば逃避的に（この言葉が不適當であるならば）“諦観して”表わされている。この点において西欧の文学作品等と比較して、物足りなさを感じるように思われる。これは Theippan Maung Wa のみでなく、ほとんどのビルマの文豪に云えることである。さて、マウン・ルー・エーの宗教観を「Min:Lat」の中に求めて見よう。

" ဤသင်္ဘောတံ ဝေဇာဝတီမြစ်ကြောတူ နိဗ္ဗာန်သွားတိုင်း တရက်၊ တရက်တူ နိဗ္ဗာန်သွား ပေပြီ။ ၎င်းရက်တို့ ကား ပြန်၍ မလာ။ လူတို့ အသက်သာလျှင် သေရက်သို့ နီးလေပြီတကား။ မည်သည့်အရာမှ မမြဲပါတကား။ အနိစ္စပါတကား စသည်ဖြင့်တရားတော်ကို နှလုံးသွင်းကာ ကျန်ရစ်နေရှာကြကုန်၏။ "

Hket-san: Sāpe p.31, l. 3 ~ 8

（この船がイラワヂ河を下って行く毎に、一日一日が過ぎて行つた。これらの過ぎ去つた日々は二度と再び帰らず、人間の生命も終局の日に近いて行くことであろう。いかなる事物も不変たることはあり得ない。世の変遷輪廻の理法をいつまでも心に留めていた。）

また、 အနိစ္စတရား ကို မလွန်ဆန်နိုင် ပါတကား။ "

（世の無常を如何ともし難し）

လောကတွင် မြင်မြင်သမျှလူသတ္တဝါတို့လည်း ပျက်စီး ကြရမည်သာ။ "

（世にある目に見ゆるものすべて衆生は亡びる運命にあるのみ）

ထီးနန်း အဆက်ဆက် ပျက်စီးခဲ့လေပြီ။ ဝေဇာဝတီမြစ်ကား မလွှဲမရှား သွား မြဲတိုင်း သာစီး၍ သွား နေလေသတည်း။ "

（歴代の王朝は亡びたが、イラワヂ河はゆるぎなく永久に流れて行く。）

等によつてもすべてこの世の無常であるという根本理念の上に立ち、永久に変らざる仏の道をイラワヂ河の流れにたとえている。これはビルマ人特有の仏教に対する無意識の内に感じられる自覚である。

「Ava」においては、“三隻の船でイラワヂ河を下って行つた。時刻は5時半、そば降るこぬか雨。おりたる夕のとぼり。陽の光なく、サガインの山頂に薄青く輝く無数のパゴダを迎げば神々しき感あり。川面の流れなく油を流したる如し。この上なく心安らかである。話す人さえない今、この物静かなる境地の有様に思いをめぐらす時、我が心は快感を覚えていた。”とあるが、このあたりは寂然閑静の境地を仏教理念の底に秘め最もビルマ的に表現している。この他にも彼の作品の所々に“世の変遷輪廻は如何ともし難い”意味の言葉が表わされている。また「Beda」に

は ၆၀၀ ၏ ၆၆. ၆၆: ၏ ၆၆. p.40 “生あれば死あるが必定なり” と悟りの境地が述べられている。

その昔、仏陀が弟子のラーダに教えた無常の原理、即ち、色受想行識の五蘊のすべて移ろい変らぬものではなく、この世に存するものの変転せざるものがないことをティパン・マウン・ワはベーダー樹の梢によって説いている。

4) Maung Lu Ai の結婚観

マウン・ルー・エーの結婚観並びに女性観に関しては、主として「快樂」より察せられるであろう。結論を先に言うならば、彼は妻を娶り、より完全なる生活段階に入ることを否定している。というのは“新聞を読んでいる時、一友人の結婚したことを知り、その新聞を床に投げ捨ててしまった。”という辺から推察できようが、かなりの年令に達している彼が、妻を娶るならばどのような女性が適当であろうかと思ひめぐらしていたことは事実のようである。“A子は姿形も美しく大へん可愛いのであるが、実家には金がない。女というものはダイヤなどの飾り物を欲しがるものである。自動車にも乗りたければ、家もりっぱに飾りたがる。しかし私 (Maung Lu Ai) の俸給は彼女の欲望を満たすに充分でない。だから、こんな心配事をするよりは今のようにならば独身で居る方が一層ましである。B子は裕福な地主の一人娘で経済的には何の心配もない。しかし彼女は大へん醜いそうである。こんな醜い妻を祭の時などに連れて行くなら、「マウン・ルー・エーは金に目が眩んだのか」と人々の口先きにのぼるであろう。そんな人々の言葉を見無視するとしても、金持の娘であれば、尻に敷かれるという心配もあるので、どうも気が向かない。C子は相当に経済的にも豊かで政府高官の娘で顔立ちも良い。しかし、彼女の母親は大へんきりまわしが上手だとの評判なので彼女と結婚すれば、事々に窮屈な思いを余儀なくされることは間違いない。D子は大金持ちの娘で、器量も良く、気だてもやさしい。おまけに話し振りに愛嬌がある。非の打ちどころがない。しかし彼女の兄がとてつもなく慢で酒飲みである。遊んでばかりいて世間づきあいがよくない。だからこんな男と縁続きになるのは感心できない。また、工場主の娘で利口であるという噂のE子は金はあるし、美人で、話しっぷりもよく、すべての点において言い分はないが、彼女の父親は先妻が死んで間もない頃、彼の娘より3つも年下の若い後妻を娶ったと聞く。こんな男と親戚関係をもつ気はさらになく等々。このように種々な女性についてその裏づけ、家族に至るまで調べているが、どうも彼の気に入るケースはないようである。女性はやはり美人の方がいいらしいことはうなづけるが、結婚するに当たって、女性自身よりも経済問題、家族の人柄等を重視しているのは、今日の急進社会ではすでに過去の遺物になろうとしている強力なる人間関係、あるいはビルマの旧慣習的社会構成に由来するのであろうか。

5) Maung Lu Hmoe について

「快樂」においては結婚を否定していたマウン・ルー・エーもその後数年の間に Hkin Than

Myin という女性と結婚したらしく、「快樂」よりずっと後の作品である「Maung Lu Hmoe」, 「Hkyeit Pon Kyaw」, 「Hketsan: Potto Wāda」, 「Hnaik-hnaik Hkywot-hkywot」*等においては一粒種である Maung Lu Hmoe のことが細やかに描かれている。

(註) 「快樂」はビルマ暦 1292 年に書かれ, 「Maung Lu Hmoe」, 「Hkyeit Pon Kyaw」, 「Hketsan: Potto Wāda」, 「Hnaik-Hhywot-hkywot」はそれぞれ 1299 年, 1302 年, 1302 年, 1303 年に書かれている。なお作者が没したのは 1304 年である。

「Maung Lu Hmoe」においては Maung Lu Hmoe の出生の事情を彼自身が独白するという変わった形式で書いている。“私の誕生日は（ビルマ暦）1299 年 9 月 8 日（西暦 1937 年 12 月 25 日）である。父の名は U Lu Ai, 母は Daw Hkin Than Myin である。”と述べている。そして彼がまだ母の体内に居た頃, 外界の話を小耳にはさむにつけ, “私は男の子だろうか女の子だろうか, また男の子とはどんなもので, 女の子とはどんなものであろうか” と思いめぐらすあたりは読者が思わず頬をほころばせるところであるが, 終末部分において, 生れたばかりの赤子に向って父 (U Lu Ai) が“お前の名前は Maung Lu Hmoe だ, よく覚えておくんだよ” と告げる部分は 1 個の生命を創造して歓喜にうちふるふる父親の愛情がにじみ出ている。

「Hketsan: Potto Wāda」では, 子供がむずかるので困り果てるが, それでも子供は可愛くて仕方がないという慈しみ深い父親の情を克明に描いている。そして“息子は父親の手に負えず, 弟子は師の手に負えず, 国民は政府の手に負えない時代になったものだなあ” としんみり締めくくっている最後の文章は作者の晩年の述懐として甚だ興味深い。「Hnaki-hnaik hkywut hkywut」においてもマウン・ルー・エーが好奇心の強い盛りである 3 才になった Maung Lu Hmoe に嬉しい悲鳴をあげている様が描かれている。

以上述べてきた 5 項目を総合して考えるならば, マウン・ルー・エーなる人物の人間像をおぼろげながら把握できると思うのである。さてそれでは最終段階として Theippan Maung Wa のそれに触手を延ばして見よう。Maung Lu Ai 即ち Theippan Maung Wa 自身と見倣してよいことには間違いないと確信する。彼がビルマ人であり, ビルマに生を受けたが故に, 彼の思惟・行動の底流には常に仏教理念が大きな比重をもって流れていたということも確かであろう。宇宙の原理を甘受し, 極楽浄土のみを固く信じていた姿というのは釈迦の教えを信奉するすべての人々の真の姿でもあるのだ。彼の数々の作品の中で, マウン・ルー・エーが登場せず, 作者自身の所意を単明に表わしているものとしては「Min: Lat」が代表的なものであろう。マウン・ルー・エーの性格を通じて見るにしても, またこの「Min: Lat」を通じて見るにしても彼 Theippan Maung Wā が国を愛し民を愛し, 国のため民のために努力したことに対して疑惑の余地はない。しかしながらそこに潑刺とした進取的気分が何ら感じられないのは母国ビルマの宗教的・気候的条件のせいとのみ片づけられるものではなく, やはり彼自身の有する性格であろう。一方, 真面目で同情心にあふれ, 常に誠実な態度で事に当たっている。彼はまた老人を愛し, 子供を非常

に可愛がった人でもあるようだ。この点、良寛和尚を思い出してならない。世の中には種々様々な人間が居り、過去にも居た訳だが、とりわけ“良寛さん”に似ているように思われる。結論を急ぐならば、オックスフォード大学に学んだ彼ではあるが、決して急進的な思想の持ち主ではなく、旧慣習的社会に在って、仏教の教えに基づき強く未来を信じ、良く言えば模範的な、悪く言えば平凡すぎるような人間であると思う。しかし、常人に卓越した教養と分別、多少変屈なその生活態度は見落してはならない点である。

彼の作品の随所に示されていることは、子供、老人、青年男女、種々な身分、階級、職業の人々、貧しい人、犯罪人に対しても否、動物——犬、牛、馬や鶏のような人間との生活に関係の深い動物——に対してまでも深い愛と同情に溢れていることである。その根底をなすものは、もちろん仏教思想であろう。

以下、種々の作品より作者自身を示す主人公マウン・ルー・エーの人間性を観察してゆこうと思う。彼の何人に対しても同情深い性格を具体的に探し出すならば一例として、「Kin: Saung (船名)」から引用しよう。(p.51)

「(ビルマ文省略) キン・サウン丸の汽笛は村中の子供たちの楽しみではあったけれども、大人たちのうちで、109条、110条に関係のある人々の驚きと云ったら大変なもので、どうしてよいかわからない。逃げる準備をする者、うろたえて何も手につかない者、もし逮捕されでもしたらどうしよう。特にアヘン常習者たちは立っても坐ってもいられない様子である。何ら罪のない善良な人たちでさえも心の中で一体、郡政長官が何のために船でこの村へやって来たのだろうか。特別な事情があるのだろうか。等々を小声でつぶやいていたが、その声の家から家へ軒一軒伝わって行った。村長は心の中では何も言うことはない。ただ心配でおののいていた。人々はみな、ただごたごたを避けようとしている。自分は何も関係がない。しかし、長官のいる方へ最初に行かねばならないのは自分だ。何故、郡政長官が来たのか。自分を調べるためだろうか。何事だろう。このように考えながら、ひざをふるわせている。」

このように各層の人々に対して入念に気を配り、同情している様子がかがわれる。しかし、また同情深くはあるけれども役人として法律を重んじなければならない責任感の強い性格が「第110条」と「せつ盗罪」の中に描かれている。

「第110条」では「キンサウン」に描かれているのと同じような場面が多いが、郡政長官マウン・ルー・エーが官船に乗ってチュエ・チャン村に着き、村人たちの心配そうな顔つきを見て、彼がこの村を訪れたことがこれらの人々に迷惑をかけているのではないかと推察するが、ここで彼は村人たちに対して気兼ねしているのではなく、同情深さを示しているように思われる。というのはビルマ人は他人に対してあまり気兼ねしないようである。気兼ねということは人より施しを受けたり、世話をして貰ったりする際におこる感情である。ビルマ人は人に施しをすることによって来世に幸福が約束されると信じている。その故に、心よく人に施しをする。その代り自分も人より施しを受けたり、世話をして貰うことは当然の事と考えている。それ故、大ていの場合ビルマ人は気兼ねをしない、まして高官の地位にあるマウン・ルー・エーが村人に対して気兼ねすると

いうことは考えられない。

村人は心の中では彼がこの村へ到着したのは税金を催促するためだろうか。いや、今はその時期ではないはずだ。それでは何かある事件の犯人を探すためだろうか。または、どこかの“猿の子”(おしやべりの裏切り者)が村長のことを役人に悪く告げ口をしたためではないだろうか、等々のことを考えているのではないだろうか。とマウン・ルー・エーは思いめぐらすのであった。ただ心から喜んで元気に迎えてくれるのは無邪気な子供ばかりである。

この村には3人の悪党がいて、その中1人は阿片常習者で、他の2人は村の中を当てもなく歩き廻っては善良な人々を苦しめている連中である。もちろん、彼らはマウン・ルー・エー1行が来たことを聞いて、ふるい上り、南の方のジャングルへ姿を消してしまう。その外に、阿片を密売している中国人とその近くに住む酒を密売しているマウン・ミヤがあわてて密売品を隠してしまう。何のかかわりもない人々はマウン・ルー・エーの訪問の理由を知りたく、耳をそば立てている。ところが、やはり阿片密売をしているボーチッという男はマウン・ルー・エーの来たことを全然知らず、彼の娘と食事中であったが、もし知っていたら、真先に逃げていただろう。村長がマウン・ルー・エーから命令を受けたのであろう、助役と共にボーチッの家へ入って行くのが見られた。もちろん密売品が見つかるようなことはしていない。前日に売りさばいていたのである。いろいろと村長が彼に質問していた。突然ボーチッが外へ飛出し、その後ろから村長が彼を引き戻そうとして泥沼の中で格闘になる。助役も村長に協力して遂にボーチッを逮捕する。ところが村はずれの所でボーチッの妻フニン・ミヤインがその知らせを聞いて、夫を助けようとして村長に抵抗する。その時、他の1人の婦人がマウン・ルー・エーに知らせたので彼は6連発銃を携えて現場に至り、とり静めたので、村人たちはやっと安堵の胸をなでおろす。手錠をはめられたボーチッの姿を彼の妻と娘のエーメが群衆の間に混ってただ忙然と見つめていた。マウン・ルー・エーは船に戻ってきて、「110条」に基づきボーチッを告訴するために証拠を調べた。保証人を出さなければ2年間の懲役である。1年の罪を言い渡す筈であったけれども村長に抵抗したために2年を言い渡さねばならなかった。村長は自分に抵抗したのだからボーチッが2年くらったことを心ひそかに喜んだ。ボーチッには保証人になってくれる人がいないので、一そう悄けてしまった。娘のエーメや妻のフニン・ミヤインたちと別れて行かねばならない。獄舎で使う必要なだけの金銭を妻に工面を頼んだ。フニン・ミヤインはポケットから2チャットを取出して渡したが、フニン・ミヤインの目には涙がうかんでいた。2年と云えば長い。その間どうして過ごしたらよいだろう。夫のボーチッとは一度もまだ別れたことがない。以前、結婚した頃はボーチッは良い人であったがその後、阿片を吸うようになってから悪の道へ入って行き、盗むようにもなり、そのために悪名が高くなった。ああ、困ったことになってしまった。

ボーチッとフニン・ミヤインの事情を知ったマウン・ルー・エーは彼らに同情した。けれども、自分としては、どうすることもできない。ただ自分の責任を果すだけであった。ボーチッが連れられて行った後、家の表に立っていたフニン・ミヤインとエーメは今後どうするだろうか。と云って同情ゆえに彼を投獄しない訳にはゆかない。もし投獄しなければ、自分の責任は果せな

い。自分の責任を果すためには同情心をおさえねばならない。前へも進めない、後ろにも退けない気持ちになり、この事を考えている内に官船は妻と娘を河岸に残したままチュエチャン村を離れて行った。

次に「せう盗罪」についてあらましを述べると、「(原文省略)……(中略)……郡政長官は裁判官席についていた。彼の年齢は35才ほどであろう。背格恰はかなり低い方で、色が黒い。頭髪は長く、ビルマ人らしい人柄である。かなり暗い法廷の室の中の裁判官席に坐って自分の英語で書いた判決文をビルマ語に訳しながら説明していた。それは強盗事件についてであった。裁判官席の前に置いてある椅子に坐っているのは2人の弁護士と検事たちであって、2人の弁護士の内1人は皮膚の色が白くて丈が低い。他の1人はかなり背が高いがやせている。検事長は赤いガウン・バウンを巻いていた。カーキ色の弁けい縞のシャツを着て、赤いロンヂーをしていた。皮膚はやや黒く丈は低い。腰をおろす椅子がなかったので、裁判官の右側の床上に立っていた弁護士が2名いたが、2名共その顔付が上ビルマ出身者であることを示していた。裁判官席の左側の床上に立っていたのは2名の警察官で、1名はパンジャブ人、他の1名はビルマ人であった。パンジャブの巡査はりっぱなひげをふさふささせ、堂々たる体格の持主であった。裁判官席から10フィートほど離れた被告たちのいるところには強盗罪で告訴されている5人の容疑者が立っていて、裁判官が読み上げている判決文に耳をそばだてていた。それら5名の被告の中には皮膚の色の黒い者もいれば、顔色の青白い者もいて恐ろしくもあり、同情すべきでもあった。威厳を保っている者もいたし、顔をじっとさせたままうなだれている者もいたし、1人の者は図々しくも裁判官をぢっとにらみつけていた。頭には手ぬぐいでターバンをまいている者もいたし、ロンヂーでターバンをまいている者もいたし、彼らが着ていたシャツもボロボロで汚れていて、白く清潔なのを着ている者は見あたらない。彼らのロンヂーもまた汚れてすり切れていた。

被告は5名づつ並んで立っていた。一方の側にはインド人の警官が1名ぢっと姿勢を正したまま立っていた。他の側には、まだ18才位いの若いビルマ人の警官が裁判官の説明文を耳をすまして聞いていた。彼の心の中にはどのような考えがあるのか誰にも言うことはできないだろう。被告5名が立っている所の右側の床上にはひざまづいて坐っている2人の女が容疑者であって、年齢は若い方の女が18か19位いでもう一人の方はもう少し年長であろう。それぞれ緑色の毛布を身体におおっていた。皮膚の色は褐色で、髪には櫛がかけられてなく、インド婦人のように髪を結っていた。裁判官に向って手を合わせて拝みながら判決文に耳を傾けていた。この2人の中で年上の女は若い女の夫の兄の妻である。若い方の女は男の被告の中の一人の若い男の妻である。その2人の女はその男が盗んで持ち帰った品物 (taik-yā-bā pissī:) の従犯者として告発されていた。この裁判はそれら二つの事柄を含めて行われたのであった。

その若い女の被告は生れて1年ばかり経った位いの男の子をひざにのせていた。その子にはシャツも着せていない。頭は坊主剃にしてある。その子供は裁判官の顔を見てほほえんだり、人さし指を彼の方へ向けたりしている。床を手の平で打ったり、事件について聞きに来ていた人々の

方をふり向いて笑って見たり、愉快そうな顔をしていた。父や母の困った事や心配ごと等は一向に知らないのである。

裁判官は事件を説明しはじめ、事件はだんだん明白になってくると、被告たちは心の中では「我々は恐らく獄に入れられるだろう」とそれぞれ考えていたらしい。

太陽の光もだんだん薄暗くなってきた。来庁していた人々は外側で一言もしゃべらないで耳を傾けていた。法廷内でも何の音も聞かれない、ただ裁判官の説明している声だけがきこえた。

この時に若い女の被告が自分のひざの上に楽しげに坐っている子供を見て、自分の夫の方をふり向いた。また裁判官の方をも見た。目から涙がぼろぼろ落ちていた。もし自分たち夫婦共投獄されたら、この子供をどうしようか。獄舎内で自分はどのようにゆこうか。ろう獄なんて今までに見たことさえないのだ。何と恐ろしいことだろう。自分たち夫婦は自分たちの罪のために獄へ投じられるのは当然であるとしても、この子供は何も知らない。本当に罪がなくて、自分たちと一緒に獄舎へ連いて来なければならないとは、と云っても、自分としてはこの子を獄舎の外に置いては置けない。

本当は自分には罪がないと思う。夫が従犯させたために告発されたのである。夫がそのかさなかったならば、逮捕されなかったであろうに。自分の夫に対しては腹を立てたくなる。自分たちが生活して行くために夫は生命の危険を冒して盗み、自分たちにあたえてくれたのだと思えば、また感謝の念も湧いてくる。そして怒りは消え失せて同情心、思いやりの心、愛情などが起ってくる。夫がろう獄に入れられるのに自分はどのようにして、ろう獄へ夫について行くことが拒めるだろうか。夫と離れて獄舎の外に暮しても何の利益があらうか。子供は何も知らない。ろう獄の中へついて行かう、等々と考えて、子供と夫のことをあれこれと思いめぐらしながら、目から涙が流れ落ちるのをふいていた。

犯人である夫も妻と子供の方にしばしば目を配っていた。男なんだから涙を出さないように気を強くもつように努力していた。自分は獄舎に入れられても構わない。罪に応じて罰せられるべきだが、妻と子供は自分のために獄に入れられることになるのだ。自分が盗んできた物を妻は使用したのである。自分がもって来なかったなら、このようにそれを使わなかったであろう。また逮捕されなかったであろうし、告発もされなかったであろう。自分がもってきたお金を子供が使ってしまったことは別として、それは全く知らずに使ったのである。自分は投獄されても男だから耐えられるが、妻は女だから、どうして耐えられようか。妻に対して同情心が溢れていた。

このようにそれぞれの身の上について考えている内に裁判官が読み上げていた判決文は終りかけていた。読み終った時に5名の被告全部に対し罪が明白になって、重労働と禁錮3年を課せられた。女の被告2名は重労働と3ヶ月の投獄を命ぜられ、判決が終るや否やマウン・ルー・エーは裁判官席を下りて行った。室中が暗くなっていた。被告たちはがっかりした様子であった。

夫婦の被告は互に顔をぞっと見つめ合いながら、彼らの眼からは涙がとめどもなく流れおちて

いた。子供は両手をあげて（何も知らず）うれしそうに拍手を打っていた。傍聴に来ていた人々も静かに退場する。警官たちは被告を監房へとつれて行った。

「強盗」や「110条」(p.43の中頃)の中にもうかがわれるようにマウン・ルー・エーには無邪気な子供に対する愛情が溢れている。この子供を愛する性格は「Hkyeit Pon Kgaw (幼児の言葉)」・「村の誇り」等の作品の中にも見出される。

老人を愛し敬うことはビルマ人の美点の一つとされている。ビルマの諺にも **သက်ကြီး ရွယ်လွန် - အိမ်တံခွန်** Ⅱ (直訳: 老人が居ることは家の旗印である、即ち「桃李もの言わず、下自ら蹊をなす」の意) と云われる如く、ビルマ人は老人を敬愛することを誇りとする。マウン・ルー・エーの性格は平凡なビルマ人を思わせるかも知れないが、彼は心から老人を愛し、同情し、信頼し、親しみを示している。作者は「誠実」という作品の中で主人公マウン・ルー・エーを税務官として描き、ウ・ター・ヤという老人に対して限りない同情を示す場面を描いている。

「(中略) マウン・ルー・エーは幼い頃、祖母に育てられた故かも知れないが、どこのおぢいさんやおばあさんにでも会えば、いつも親しみを感じていた。郡政官であった頃、出張して村落を見廻っていた時には老人に会えば、会釈をする程度で勤務が忙しいために長い時間に渡って話しをする機会がなく、従って知り合いになることができなかった。夜、仕事が終わってからも他の用件のために老人たちとゆっくり話すこともできなかった。しかし、今度の税務官としての仕事は以前とは違っていた。ある村に着けば10日間ほどはテントを張って滞在し、朝は土地を調べ、昼間は帳簿を調べて了えば、その日の午後は早く仕事は終るのである。夕方より夜にかけて村人たちと混って話しを交し、村長、助役、土地査定人、委員会の人々をはじめ、すべての村人と親しくなる。……中略……

ある時、パンチー村という小さな村落の西方の小高い岡に立っているニヤウンチンの樹の下にテントを張ってマウン・ルー・エー一行は(書記2名と雑役4名を含めて7名)滞在することになった……中略……ある日の朝、6時に土地を上中下と3段階に分けるために4名の査定人と共にマウン・ルー・エーは書記のマウン・ハン・セインを連れて行った。上記査定人4名のうち3名は背の低い、よく動き廻る、話し振りが上手で、抜目のない、見えを張る型の人々であった。しかし、マウン・ルー・エーが郡政官をしていた頃によく出会った漁業場の持主のような悪らつで、嘘つきなかつぎ屋ではなかった。残りの1人は年令が60才を過ぎた、少し腰の曲った、肩には一枚の布(きれ)をひっかけただけで、エンダー(ビルマ服)は着ていないこの老人は人を欺いたり、見えをはったりするところは全くない。ありのままを話す人である。マウン・ルー・エーの心にはその老人の誠実さが理解できた。彼の名はウ・ター・ヤと言った。

マウン・ルー・エーは土地を調べ終わってからウ・ター・ヤと一緒にテントの方へ散歩がてらに帰って来た。ウ・ター・ヤの話によると、彼には子供が6人いたが、2人は幼い頃に死亡し、今は息子と娘が4名残っていて、みなそれぞれ世帯をもっていたのでウ・ター・ヤ夫婦の世話をしてくれる余裕がなかった。ウ・ター・ヤにしても子供たちが世話をしてくれなかつても悲しいと

も思っていなかったし、彼らに頼ろうとも思っていなかった。村の北側に一区劃の空地进行整理して、菜園を作って生活をはじめてから数年になる。その菜園の畑からとれる樹の果実を売って老人夫婦は細々と暮らしていたが、ただ食事をお腹いっぱい食べられるだけであった。着る物は充分ではなかった。人々が同情してあたえてくれる着物を感謝して着ていた。しかし、寒い季節になるとふるえながら、身を包む毛布もなかった。雨期には蛇や蚊にかまれるが、といって蚊帳を買うだけの余裕はなかった。彼ら老夫婦の所有地である菜園にかかってくる税金は3ルピーで、それを払うためにはせせと働かねばならなかった。しかし、昨年は税務署の役人がなぜか知らないが、ウ・ター・ヤが耕さなかった地面も含めて税を査定してきたので18ルピーの税金が課せられた。ウ・ター・ヤ夫婦は困ってしまった。税金を収めることができなかったその結果はその小さい土地を政府に返してしまわねばならなくなり、やがて追放令状がきた。他所には住むべき土地がなかったので、どうしてもそこにすわらねばならず、そうこうする内に告訴されて、罰金としてまた3ルピー収めねばならなかった。村の人々が集まって支払ってくれたのでやっと投獄されることだけは免れた。

ウ・ター・ヤの事情を聞き知って、マウン・ルー・エーは同情に耐え切れず、余暇をさいて、ウ・ター・ヤに自分のキャンプへ来るように話した。お茶の時間や食事の時には毎日彼を呼んだ。お茶や食事に招かれることはマウン・ルー・エーにとっては普通のことであったが、ウ・ター・ヤにとってはとても珍しいことであった。ウ・ター・ヤを税務長官が招待することがやがて村中の評判になり、ウ・ター・ヤが家に帰ってくると、すでに噂が立っていて、彼にいろいろ尋ねに来る人が多ぜいいた。ウ・ター・ヤは村ではかなり有名になってきていたが、彼はマウン・ルー・エーにただ感謝するばかりであった。

ピアンチー村に9日か10日間ほど滞在した後、シュエパウ村へ移動することになっていた。ウ・ター・ヤは全く悲しい気持になった。けれどもピアンチー村を離れて行く日になってもウ・ター・ヤは姿を見せない。どうしたことだろう。悲しいためだろうか。それとも、そのことを念頭に入れていないためだろうか。ウ・ター・ヤには挨拶にくるようにマウン・ルー・エーは人をつかわしたのだが家にはいなかった。別れを避けているのだろうか。とあれやこれやいろいろとマウン・ルー・エーの心に浮んでくるのであった。

夕方になって、4時を打った時、マウン・ルー・エー1行がシュエパウ村へ発つべく川岸へ下りて行った。船に荷物を積み、マウン・ルー・エーが船に乗ろうとしていた時、村の北の方からウ・ター・ヤが走ってくるのが見えた。やがてマウン・ルー・エーの近くに到着した。息を切らしながら、手から1本のびんを、何のびんだらう。蜜の入ったびんであった。1人の友人から1ルピー借りてきて、朝早く6里ほど距ったチャウピャー村から買ってきた蜜のびんであった。その蜜の入ったびんを税務官に感謝の贈り物として差出した。おー、ウ・ター・ヤよ、よく恩を知っていてくれた。しかし、マウン・ルー・エーにはウ・ター・ヤの蜜のびんをどうして受取れようか。恩を返す積りでくれるのを受取らずに拒んでしまえば、ウ・ター・ヤに対して気の毒であろう。マウン・ルー・エーは困った。その困難から救かる方法が一つある。ウ・ター・ヤがくれ

る蜜のびんを貰い、彼に3ルピー与えてやることである。ウ・ター・ヤも満足するだろうし、マウン・ルー・エーも心おきなく次の村へ行ける。食べるものにも着るものにも恵れないこの老人が政府より俸給を貰っている税務官に蜜の贈物をするほどの誠実な心をもっているとは不思議だと考えながらマウン・ルー・エーはパンチー村を離れて行った。……」

物語はなお続いているが、次のシュエ・パウ村においてもウ・ター・ヤと同じような境遇にある老人に同情をよせている場面が見出される。

「16才の時にアラカンから来て、ずっとこのカレン部落に住んでいるウ・シュエ・アラ・アウンという老人にマウン・ルー・エーは目をかけ、四方山の話聞く。勿論、長年カレン人と共に生活しているのでカレン語は全くカレン人同様だが、アラカン語は彼の母語であるから、一層親しみを感じている。彼は若い頃から独身で、今でも一人で小さい畑を耕して暮しているが、いつまで経っても、生れ故郷のアラカンは忘れられず、冗談に飛行機に乗って帰りたいものだとよくもらしていた。

貧しい時には不幸が重なってやってくるものだ。ウ・シュエ・アラ・アウンの菜園に対して税金の督促状が2通もきたが、彼にはどうしても払えない。心配の焰が燃えてくる。自分がたとえ食べなくても払わねばならない。税金を収めなければ告訴されることになるが、幸に村長のウ・チャーが彼の代りに払ってくれたのでやっとのことで救われた。

マウン・ルー・エーは何事につけてもこの老人に同情し、かばってやったので、ウ・シュエ・アラ・アウンもマウン・ルー・エーに対し、限りなく感謝した。以前のパンチー村のウ・ター・ヤのようにウ・シュエ・アラ・アウンも彼のキャンプへしばしば話をしに来た。マウン・ルー・エーがこの村へ来て3日目の夕方、少し退屈気味だったのでキャンプの前で小説を読んでいると、ウ・シュエ・アラ・アウンがやって来て、マウン・ルー・エーの近くに坐り、ロンデーのポケットから6ケの玉子を取り出して、マウン・ルー・エーの前に置いた。これらの玉子はひなに孵す積りでとっておいたものであったが、マウン・ルー・エーに感謝の印として持参したものであった。しかし、それらの玉子をマウン・ルー・エーはどうして受取れようか。彼はウ・シュエ・アラ・アウンに同情し、また、彼の親鶏にも同情した。しかし、これ程貧乏なウ・シュエ・アラ・アウンの好意と感謝の気持をほめずにはおれなかった。この世の中で人が貧乏であればあるほど恩を知るものであることの理法を考えた。貧乏な人々ほど同情とはどんなものであるかを知っている。豊かに暮している人々が同情というものを果してどの程度知っているだろうか。マウン・ルー・エーはポケットから2ルピーを出して、ウ・シュエ・アラ・アウンにお礼として返したのみならず、彼がもってきた玉子をも彼に返した。ウ・シュエ・アラ・アウンはマウン・ルー・エーがなぜ返すのか理解できない。マウン・ルー・エーが事情を話してはじめて老人は納得がゆき、その場を去った。ああ、貧乏な人はなぜそれほど義理が厚く、人に物をあたえたいのだろうか。

この「誠実」という作品では、2人の老人（ウ・ター・ヤとウ・シュエ・アラ・アウン）に対してマウン・ルー・エーの同情の深さを示し、この老人に対する愛と同情は一般のビルマ人にも共通する美点であろう。

“Lūmaik” という作品では、この題名を直訳すれば「愚か者」の意であるが、その内容から見て「無法者」または「ならず者」を意味しているようである。殺人を犯して島流しになり、その後、村へ帰って来たウ・トアという男が怖いもの知らずに村中を暴れ廻り、暴言を吐き、周囲からならず者の仲間がたくさん彼の元に来ってくる。また、どこ料理屋へ入っても、ただ食いをし、その上 maik-kye: を払わない人はいろいろなひどい目に遇わされ、植えてある野菜が荒されたり、せっかく耕した畑が台なしにされたりする。Maik-kye: とはならず者を追払うために支払う Palm oil (袖の下) のことである。また、pwè (祭り) を催す時も、彼に相談せずには行われない。すべての催しが彼の意志通りにさせられ、彼に反抗する者は誰一人いない。

このように彼を恐れてはいるが、何か面倒な事件に出くわした時には、彼にその解決を頼めば即座に解決してくれるので、村長に頼むより事がはかどる。遂には彼に頼り、彼を尊敬する者さえ出てくる。

ウ・トアの最初の妻は彼が島から帰る前に2人の娘を残して病死し、娘2人は困窮のどん底にあったが、ウ・トアが村へ帰ってくると、たちまち金銀財宝がころがってきて、みるみるうちに気楽な生活ができるようになった。何と不正がはびこることだろう。

ウ・トアは40才位いの婦人と再婚したが、その婦人には16才になる Mya Sein という可愛らしい連れ子があったが、この可愛い兎をもウ・トアは自分のものにし、2人共豊かな暮しをする身分になった。何という世の末路か。

今は Daw Hsin (再婚した婦人) には2才半の男の子と、Mya Sein には2才の女の子がいて、皆楽しく満足に暮す。娘と母親共に同じ夫をもっているのも、二人の間には嫉妬や争いは起らない。二人はその村は云うに及ばずその近隣よりはるか遠くまで名の売れた夫を敬っていた。しかし、このような不正がいつまでも続く筈がない。やがて彼も浮き目を見る日がくる。

ある時、ミヤ・セインがマウン・ボ・ワという人の豆畑より豆をちぎり取って売払ったので、マウン・ボ・ワは彼女を非難した。この事を聞き知ったウ・トアは早速ビルマ刀をもって彼の家へ出かけ、彼の家を荒し廻ったあげく、それでも飽き足らず、彼に切りつけようとするので、マウン・ボ・ワは一目散に逃げる。

遂にマウン・ルー・エーの登場となり、マウン・ボ・ワの告訴によって、マウン・ルー・エーはウ・トアの逮捕に向う。最後にウ・トアは罵り雑言を残して去る。

この Lū-maik という作品では最後の場面に主人公マウン・ルー・エーが犯人を逮捕するといった善悪をはっきり区別し勧善懲悪を主題としたものであり、不正の末路と作者の正義感を表わしている。ティパン・マウン・ワーの作品としては異色なものである。

「馬市」という作品では、ビルマには、いまだナッ信仰が残存していて、高等教育を受けたマウン・ルー・エーもナッ信仰という因習よりいまだぬけ切っていないことがうかがわれる。(ナッ信仰については、学報 Vol. 14参照)

パウン・ドー・ウー・パゴダではその日、Hpāyā: Pwè (仏教上の祭り) が行われることにな

っていたので人出が多かった。ところが運悪く、雨を司さどるナツたちが物凄い大雨を降らしたので、祭に来ていた人々は帰り始める。マウン・ルー・エーも祭りをあきらめて、馬市の方へ足を向けた。彼は馬に興味をもち、よい馬が見つければ、1頭買うつもりであった。馬の仲介人であるウ・ボ・ターにマウン・ルー・エーが好む馬をよく調べてもらったが、その馬には不吉な徴候が現われているというのである。それは Bwehso: (不吉な巻毛) と云って、その馬を買えば、その持主は不運に遇うと云うのである。マウン・ルー・エーが買いたいと思っている馬には Bwe-myet-yi-thwot (涙をぬぐう巻毛) という徴候が現われていて、その馬は主人に噛みつくであろうと信じられている。そのことを聞いて、マウン・ルー・エーはその馬を買う気にはなれなかった。

また、他の場面でも、馬の身体の後ろの部分に“人間の死体を引きづる巻毛”という不吉な兆が現われるが、この徴候によっても同様に馬が人にかみつくものであると聞かされて、彼は買うのを諦めざるを得なかった。

しかし、馬の巻毛の徴候は必ずしも、その持主の不運のみを示すのは限らない。幸運の徴候ともなることがある。

馬の持主の運不運の兆を示すと云われる巻毛には Atthadipani-kyan:, p. 26 に次のような種類が挙げられている。

Bwe-āma hkan	(安全の巻毛)
Bwe-auk	(下の部分の巻毛)
Bwe-adwin: let hpwè	(前脚部の巻毛)
Kaū: Bwe	(たてがみ下部の巻毛)
Kanyaung-Bwe	(背中後部の巻毛)
Kyā: hsut-Bwe	(頸下の凹みの部分の巻毛)
Bwe-Hkye ye hkan	(足の水受け部の巻毛)
Bwe-hkwā panet	(ひずめの部分の巻毛)
Hkwe: Hswè-Bwe	(臀部の巻毛)
Bwe-ngo-than-kyā:	(鳴き声の聞こえる巻毛)
Bwe-sā: hkwet hneit	(あごの部分の巻毛)
Bwe-htī: yō: sait	(傘の柄を立てる巻毛)

これらはそれぞれの意味によって、または巻毛の生えている部分によって馬の持主の運の徴候が占まれるのであって、Kawilekkhanā-kyan: または Atthadipani-kyan: 等の書物には詳細に述べられている。

マウン・ルー・エーはかなり馬に興味をもっているらしく、馬の格好、能力、技術等についても述べられている。

最後に、マウン・ルー・エーがこれほど Bwe-hsō: を気にしてはいつの日か馬を所有することができようか。と結んでいる。Nat に取りつかれることをこの上なく恐れるビルマ人に共通した点であろう。

「牛車追い」という作品の中では、作者が説こうとしていることは、言葉を換えて言うならば、平安時代の「文弱」を排して、鎌倉時代の「農商安堵」を高く評価した田口卯吉がその「日本開化小史」の中で言っている「そもそも学士たるものは何がために他の職工よりも重んずべきか、文学なるものは何がために他の貨物よりも尊ぶべきか。その功績の人類に及ぶところいかに相異なるか。余をもってこれを見るに、更に貴重すべきあるを見ざるなり、しかるをいわんやいたずらに古字に通じ古書に明らかなるのみの学士をや」という言葉とやや相通ずるものではないだろうか。ただ、このビルマの作者ティパン・マウン・ワーはアヴァ王朝時代の「文弱」を批難している所はない。

「牛車追いも詩人も人に快楽をあたえる点においては同じようなものであると云えば、詩人の気嫌を損うかも知れない。なるほど牛車追いは詩を書くことはできない。が詩人も牛車を追うことはできない。といって、詩人と牛車追いを比較することは適当でないかも知れない。

詩らしい詩を書けるものは多いが、りっぱな詩を作り得る者は探してもそうざらには見つかるものではない、と同様に、ジャングル地帯の住民なら誰でも牛車を扱うことはできるが本当に巧みにそれを扱える者はやはり少ない。詩を作れる者がすべて詩人とは限らないと同様、牛車を扱える者がすべて牛車追いとは限らない。とも角、その道を深く極めることは容易ではない筈である。

詩人が詩作に苦心するが故に、読者はその詩を楽しめるのである。また牛車追いが、がたがた道、凹んだ道、けわしい道、水溜り道、山道等をうまく操って行き、車の前後の具合にも注意を払って乗っている人に快楽をあたえ得るほどの牛車追いなら、その技倆をほめざるを得ないのである。

牛車追いと詩人とは言葉を用いることにおいてもよく似る。詩人の性癖、動作、心のもち方などが彼の詩の中にはっきりと表わされているように、牛車追いの心、動作、振舞なども牛車を追っている時に用いる言葉の中に現われてくる。

ある牛車追いは牛車を追っている時、荒々しい言葉を使用する。牛車に誰が乗っていようと構いなしだ。たとえ僧侶が乗っていようと、年頃の娘さんが乗っていようと、自分より地位の高い人が乗っていようと何も考えることはない。彼は牛車を追いながらどなっている。ただ彼の念頭にあるのは2頭の牛のことだけで、自分がののしっている言葉にも気がつかない。詩人もこの点は同じである。自分が作っている詩にのみ心を奪われているために自分の近くにいる人々には構っていない。自分の詩は誰をきづつけようと構っておれない。

また、ある怒っぽい牛車追いは牛をのしりちらすことはしないが、無慈悲にむちで打ちながら追う。牛車に乗る人たちも牛車追いの性質をすぐに知ってしまう。また、ある牛車追いはおとなしく、やさしい言葉で牛をなぐさめながら追う。彼は心もやさしい。また、ある牛車追いはピ

ルマ琴の糸のように堅くもやわらかくも自在に操つりながら牛を追う。詩人にしても同じことで、荒い言葉を使用する人もおれば、やさしい言葉を用いる人もいる。また、その中間の言葉を用いる人もいる。

有名な詩人は彼の訪れた景色について、詩を読む人たちの眼にはっきり映るように詩を作る。すぐれた牛車追いも牛車の後ろをふり向きながら車に乗っている人の心にはっきり浮ぶように車が走る所々について牛車を追いながら説明してゆく、乗客たちも崖の所へ来れば、崖の所へ来たことが解るし、車の前柱にもたれながら牛車追いの言葉に耳を傾けつつ心の中にはき道中の景色を楽しめる。牛車追いもベテランになれば、りっぱな詩人と同じように景色の美しさを表現する。ただ、詩人の場合は景色の表現を書物に印刷するので永く保存することができる。牛車追いの自然の描写は誰もその印刷して保存することに注意を払ってくれないために気の毒にもすぐにそれが消失されてしまうのである。そういった訳であるから、牛車追いは詩人のように有名にもならず、人に尊敬されることもなく、また、人の称賛も得ない。従って、記録するに値するような牛車追いの言葉は記録に留めておくべきではなからうか。

モン河の岸边にあるモン・ニンという小村に有名な牛車追いでマウン・バという人がいたが、ある時、主人公のマウン・ルー・エーは出張のためこの村にやって来て、この村で一夜を過ごした後、この村から6哩程距ったメザリー村へ早朝に出かけることになっていたもので、村長はマウン・ルー・エーのためにマウン・バの牛車を用意しておいた。モンニン村とメザリー村との間の車道はずい分荒々しい道であるし、またモン河を所々幾度も横ぎらねばならない。モン河の岸边の岩や石の間を通り、泥沼や崖をも越えねばならないし、平原をも通らねばならない。堀だらけの道や砂地をも行かねばならない。この悪い荒れた道をずっとマウン・バは朝6時頃から6頭立ての牛車を追うて行くのである。マウン・ルー・エーは車の前方の柱に背をもたれさせ、足を下へぶらぶらさせながら乗って行った。しばらくすると、いつの間にかマウン・バの言葉に思わず耳を傾けていた。マウン・バの牛を追う様子を以下に述べよう。

「さあ、行け、大きい動物よ、何をぐずぐずしているのだ。ああ、そうどんどん進むのが味気ないのか。むちを当てることはいけないね。そうだよ、こんな具合に行こうよ。は、は、こちら側の奴はなぜ引っぱらないんだろう。ずい分綱をゆるめてあるんだがなあ。さあ、行け、言うことのきかない牛め、どうしてもお前を打たなけりやいけけないのか。さあ、よく憶えておけ（一むちあてる）、ほら、進め、目がないのか。なぜ、そっちの方ばかりへ寄り進むのだ。そうだ、そうだ、そう進むのだ。よくおぼえておけ、やっとまともに行くようになった。これでよい、これでよい。道がよければまっすぐ行けるんだが。しばらく行けば、今度は山にさしかかってくる。そうすれば、また動かないんだろう。ほら、大牛よ、前に凹みがあるぞ。ゆっくり行け、あわてるな、止まっちゃいけないぞ。「ゆっくり」というのが聞こえないのか。ゆっくり、ゆっくり、シッ、シッ、シッ、……」

マウン・ルー・エーは車の周りの柱をじっとつかまえていた。車の勢いが止んでいった。徐々に凹みの中へ入って行く。そうだ、進め、行け、道がよくなってきた。また動かないのか、実に

困った牛だ。むちを使いたくないんだ。さあ、おぼえておけ。むちを当てると牛は進む。

坂道の上下り、小川を横ぎったり、二頭の牛の一头が引張れば、他の一头がとまる。やっこのことで平原に出る。今までとはちがってどんどん進む。今度は日が射ってきて、かんかん照りである。かん木の茂みさえ見当らない。種々な困難を克服しながら牛車追いマウン・バはメザリーに着いた。

彼のような上手な牛車追いの車に乗ってれば、実に楽しい。詩人が自然を描写する如くマウン・バもメザリーへの道の景色を牛車を追いながら表現して行く。

詩作においても牛車を追うことにおいても一芸に通じることの困難には変りはない。また、社会に益することにおいても二者共相異なるものではなからう。

実際の価値を認められずに世に埋もれている牛車追いに対しても適当な評価を見失うことなく、彼らに対して同情を表わしているところがしみじみと感じられる、またビルマ人の誰しもがもつ動物(ここでは牛)への愛情が仏教の慈悲に育まれた彼らには無意識の内に感じられている。

「シュエダゴン」という作品の中ではビルマ人の謂わゆる“悦楽”の一場面が描写されている。ビルマでは仏塔参詣は多分に花見遊山の性質を帯びたものであるということがよく云われるがこの作品にもその事が述べられている。

一人の老人が彼の若い頃の話を書き若い郡政長官であるマウン・ルー・エーに物語る。「イラワヂ」に見られるような楽しい場面や祭を見に行く時の楽しい場面がその老人によって話される。善男善女の勤めとして1ヶ月に9回のお寺詣りが慣習的に行われるのである。舟で行く者もあれば、道を歩きながら歌を歌ったり踊ったり、楽器を鳴らしたりして pwè (祭) に行く。また、その時は、お金をたくさんもって行くのであるが、その当時は現在ほど強盗が現われなかった。実に平和であった。すべてがのんびりしていた。今は何でも速く行われ、汽車や汽船ににも乗ればすぐ目的地に着いてしまう。が、あちらに着けばもうお金が尽きてしまっている。本当に味気ない旅である。今の仏塔参詣は昔に比べれば少しも楽しさがない。

マウン・ルー・エーは老人の話をきいて、ちょっと考えていた。マウン・ルー・エーにとって真の“悦楽”とは彼の名前が示す「平和なのどけさ」であり、一般大衆の願う平和である。

「夕暮れ」という作品の中頃にては、“悦楽”について作者は小舟によって旅をするのは大きな豪華な遊覧船や、汽車、飛行機で出かけるよりも遙かに楽しめるものであることを述べている。

「失業」という作品においては、他の作品とは異色のものであって、主人公マウン・ルー・エーが姿を現わすのは最後の場面で、メザリー村に到着した時だけである。

この作品では、マウン・インという青年が、せっかく高等教育を受けながら適当な職が見つからず、得意な英語の知識を生かすこともできないので、田舎の私立中学に英語の教師の職をすめられるが、公立でないため、人気のない学校に勤める気にもなれない。と云って、ラングーンのような大都会では英語のできる人が必要以上に多い。生まじっか教育を身につけたことが返

て仇となる。」ここに作者は世に処してゆくにはもっと謙虚な気持をもつべきであり、失業は社会がそれを造り出すのではなく、自らがそれを選んでいるようなものであることを教えているように思われる。

「Maung Nge と犬」からは規律を課す性というのをユーモラスに読み取ることができる。規律を課す性と言えども珍妙であるが、この作品のストーリー自体が実に珍妙である。概略はこうである。

「Maung Nge という運転手と犬の話であるが、この運転手がどうも乱暴でいけない。すぐに犬をひき殺してしまう。そこで犬の悲嘆を見るにつけ、いたたまれなくなったマウン・ルー・エーは度々マウン・ンゲに注意したが、聞き入れられず、終に犬を一匹ひき殺す毎に1チャットの罰金を課すことに決めた。その後、しばらくの間は運転手もそのことをよく守っていたのであるが、或る日の早朝、路上で一匹の犬が寝そべっていてどうしても道を開けようとせず、見向きもしない。この様を見て、マウン・ンゲはおろかマウン・ルー・エーまで腹を立てる。マウン・ンゲは罰金を二倍払ってでもこの犬をひき殺してやりたい衝動にかられ、終にやって下う。しかし、犬の叫び声が聞こえなかったので振り返って見ると、『この身の軽い俺様をひき殺そうなんて何んと浅はかなことよ！』とは言わなかったが、そんな顔つきで見ていた。」

最後に作者は「マウン・ルー・エーの受けたショックはどんなものであったらうか」と結んでいる。たったこれだけの最後の一文がこの童話のような話を童話のままで終らせない意味をもっていると思われるのである。文字通り飼い犬に手を噛まれた格恰のマウン・ルー・エーはずい分とくやしい思いをしたことであろうが、そのくやしきは Theippan Maung Wa 自身のくやしきにも通じるであろう。というのは、この作品の中の犬は一般大衆に、律を重んずる立場になったマウン・ンゲはマウン・ルー・エーに、そしてマウン・ルー・エーはティパン・マウン・ワ自身にそれぞれ置き代えることができると思われるからである。大衆に哀れみをかけ、大衆のために為した行為が何ら報われることがなかった場合において、郡政高官の一人でもあった作者自身の晩年の諦めにも似た感情を読みとることができるであろう。

私は以上の如くマウン・ルー・エーの人間性を観察してきたのであるが、余りの誤解に土の中に眠る彼 Theippan Maung Wa が憤慨しなければ幸いである。

参 考 文 献

- | | | |
|--|---|----------------------|
| Thippan Maung Wa
Zaw gyi
Min: thu won | } | Hket san: sāpe, 1955 |
| Theippan Maung Wa: Wutthu-hsaung: bā: myā:, 1962 | | |
| 増谷 文雄 仏教百話 筑摩書房 | | |
| 桑原 武夫編 日本の名著 中央公論社 | | |
| Judson's Burmese English Dictionary, 1953 | | |
| Lū Htu U Hla: Theippan Maung Wa Akyaung:, 1966. | | |